

國のおためになれば・それでよいのである・かくてこそ生き甲斐のある生活といふべきである・疊の上や病院のベットの上で・又も注射又も注射で蟲の息きをつなぎながら・死んだのでは全く死に甲斐のない死歿といふべきぢやないか??我同胞九千萬人は皆吾輩と同じ意氣を持てゐられるであらう・政府當局は此の意氣に信頼し斷々乎として善處したらよからうぢやないか??況んや

戦時には・あらゆる不正が許されてゐる

と昔しから言ひ傳へられてゐるに於てをや・心配するには及ばない・一旦敵國へ踏込んだら國際間の條約だつて・戦時には法律は黙す・で何の役にも立たない・どんな事を爲(シ)ても文句はない・男爵平沼驥一郎博士も其の著「建國の精神と融和問題」中で個様に言ふておかれた曰く

國際間の條約或は國際法・實力が強ければ何時でも蹂躪されて仕舞います・歐羅巴大戰の時に於きましても御承知の通り獨逸は白耳義の中立を侵害致しました・力を以てすれば何時でも之れを蹂躪することが出来るのであります云云

と申しておかれた・獨逸が白耳義へ踏込んだときの振まゐは實に戦慄すべきもので其の亂暴は「メエテルリング」の戦亂後に歌ふた詩で想像が出来る或は

富豪を〇〇〇してもよい

銀行を〇〇〇してもよい

結局は戦争が終れば

正義は自然に判明する

と言ひ傳へられても居り又

勝てば官軍・負ければ賊

とも言ひ傳へられてゐるから・戦争の目的は勝つことであり主義主張を貫徹する處にある・言ひかゆれば勝ちさへすれば是も非もない・負けたら命を差出せばそれで事は済む・蓋し他國の壓制下に姑息な生活をつづける程・人間に取て大なる恥辱はない・孟子にも

恥の人に於ける大なり矣

とかいてある

倭奴!!なにをいふ

朝鮮よこせ

琉球よこせ

臺灣よこせ

南洋統治をかへせ

と侮られて・それで尙且つ雌伏してゐることは・吾々の抑も忍び難い所である・考へざる可んやぢやな

いか??

〔す〕 寸の字の話

「す」の音のある脩身語は極めて少なく、あれば醉生夢死ぐらいで、一向に話の種になるものがない。止むを得ず尺度の寸字をとりて話の話題としたのである。

先づ言ひたいことは

大禹は寸陰を惜んだ

といふことである。東晋の咸和三年といへば西洋紀元三百二十八年に當るから、今より千六百餘年前のことである。此の頃に陶侃(カン)字は士行といふた、名高い將軍がゐた。此の將軍は中華民國の政客の秘密會場たる廬山の東方、鄱陽湖畔の小都會即ち鄱陽といふ處の生れであるが、貧家の一孤兒であつたが、母様に對し孝養が格外に篤つたので、太守の張さんに見出され、段段出世して四十一年間軍政に盡し、長沙の郡公に封せられたのであるが、此の陶將軍は古今無類の勤勉家であり、活動家であつたのである。今日之恩給生活の將軍の如く、悠悠自適なんてことは絶対に排斥し、且つ身體の強壯に意を用ゐ、一朝有事の際に兵士の陣頭に立て、其の活動の若い者に劣らぬ様に心掛け、大きな水甕(ミヅガメ)壹百個を用意し、運動のための道具とし、其れを毎日朝早く、物置小屋から庭先さへ持出して並べ、それから日没頃にな

ると其の甕(カメ)を再び物置小屋へ運んだのである。此の搬運動作は雨の日でも雪の日でも決して中止したことが無つたのである。近頃流行してゐる「ラジオ」體操の様な女性的の動作では無かつたのである。是の動作が十八史略にも「陶侃の百瓶」と稱して學人に宣傳されてゐるが、此の話は吾輩も少年時代に父から話してきかせられたことであるが、蓋し人間は此の勇氣で世に處して行かねば嘘(ウソ)なのである。米國の電氣王エヂソンなども多分此の陶侃の如き氣象であつたらう。陶侃は此の如き精力家であつたから、接近の若い者どもをも常に誡めて

大禹聖者乃惜寸陰、至於衆人、當惜分陰。

大禹は聖人だ、それでさへ寸陰を愛惜されたのである。

平々凡々の民衆に至つては、分陰を惜んで働らくべきだぞ

と申されたといふことである。實際吾々は此の精魂氣魄で努力せなければならぬ。否、成功なんてことは別に秘傳があるわけでもなんでもない。紙屑買ひでもよろしい。下駄の齒入屋でもよろしい。陶侃將軍の氣象で活動すれば必ず成功するのである。嘘ぢやない。かく言ふ吾輩も其の成功せずして、鳧の間に斃死せねば、ならぬ様な羽目に陥つたのは若い頃の料簡に足らぬ處があつた爲めなのである。淮南子(エナンジ)といふ本の中にも

聖人不貴三尺之璧、而重一寸之陰。

聖人は一尺の璧(タマ)を貴重とせず・そして一寸の日陰を貴重とする

とかいてある淮南子といふ本は漢の代の淮南(ワイナシ)の王・劉・安といふ人の撰述だといふから少くも西洋紀元前のことである・その頃から吾々に已に光陰の貴重なるを教え誡めておかれたのである・五斗米のために膝を曲げなかつたといふので・人口に膾炙してゐる陶・淵明の詩に左の如きものがある曰く

人生無_二根蒂_一、飄如_二陌上塵_一、分散逐_レ風轉

此已非_二常身_一、落_レ地爲_二兄弟_一、何必骨肉親

得_レ歡當_レ作_レ樂、斗酒聚_二比鄰_一、盛年不_二重來_一

一日難_二再晨_一、及_レ時當_二勉勵_一

盛年・重ねて來らず・一日再晨なりかだし……なんてことは誰れでも知つてゐることだが・其の知つてゐる事に氣のつく人は甚だ少ないのである・梁といへば今から千四百年程以前のことだが其の頃に沈・約・字は休文といふた・博學洽聞の人があつた・澤山に書物を著はした人である・此の人の詩の句に

少壯不_二努力_一、老大徒傷悲

若い頃に努力せぬと・年寄つてから徒らに傷(イタ)み悲しむぞ

といふのがある全文は左の通りである曰く

青青園中葵・朝露待_レ日晞・陽春布_二德澤_一、

萬物生_二光輝_一、常恐秋節至・焜(焜・光也)黃華葉衰

百川東到_レ海・何時復西歸・少壯不_二努力_一

老大徒傷悲

それから又前漢の武帝の作られた秋風辭といふものがある其の詩にも

歡樂極兮・哀情多・少壯幾時兮・奈老何

歡樂も窮極にいたると哀情が多いぞ・少壯は・まだまだと思ふ中に老ゆるぞ

といふのがある・其の全文は左の通りである曰く

秋風起兮・白雲飛・草木黃落・雁南歸・蘭有_レ秀兮・菊有_レ芳・

懷_二佳人_一兮・不_レ能忘・泛_二樓船_一兮・濟_二汾河_一、橫_二中流_一兮・揚_二素波_一

簫鼓鳴兮・發_二掉歌_一、歡樂極兮・哀情多・少壯幾時兮・奈老何

それから又更に朱文公は・明確に一寸の光陰も輕んじては駄目だぞと仰せられたのである其の詩に曰く

少年易_レ老・學難_レ成・一寸光陰・不_レ可_レ輕

未_レ覺池塘・春(又作芳)草夢・階前梧葉・已秋聲

是れは學生が吟じても仲々面白いぞ・吟じて見玉へ曰く

少年・老い易く・學・成り難し・一寸の光陰・輕んずべからず

未だ覺・サめず・池塘春草の夢・階前の梧葉已に秋聲

どうです・梅だ櫻だ月桂冠だ・などと浮かれてゐる中に・忽ち白頭となり・腰は弓張月に似て朋友もボツボツ凋落し・往年の意氣も消え失せて・志(ココロザシ)事と違ふたのを嘆ずることになるから・陶潜の言ふた如く時に及んで早く勉勵するがよろしい至囑至囑

次は寸鐵・人を殺す・といふことである・木刀など幾百本あつたからとて・人を殺すための役にはならぬ否・子供がおもちやの木刀を真向に上段に構ふたからとて何ん人も恐れるものはない・僅かに九寸五分しか無いものでも本當の立派な短刀なら六尺の巨人でも容易に刺し殺し得るのである・此の故に刀は多きを要せず只精を貴ぶと言はれてゐる・昔し宋代の坊さんに宗杲(ソウカウ)と呼んだ人がゐた・此の人は字は曇晦といひ・當時の宰相張商英に見出され・庵號に妙喜の二字を貰つたのである曾て當時の高僧圓悟禪師の座に參して克く勤めたのである・或る時・吾々には一向に解(ゲ)せないが

薰風自南來・殿閣生微涼

といふ詩句を聽取して豁然として開悟したといふことである・雄辯な坊さんで・他(タ)と議論しても・急處をつかまいて一言で參らせて仕まうので同門の連面・評して寸鐵殺人底技倆があるといふたの

である・此の雄辯僧・後に孝宗皇帝から大慧禪師の號を頂戴したといふ・「大慧の」正法眼藏といふ禪宗唯一の正典を著はした人も此の坊さんだといふ

凡そ學問でも何んでも・すべて雜駁は宜しく避くべきである・藥品などは殊に純精でなければ効を奏せずして却て害をなすのである・世間の學者にも純精なものと雜駁なものがある・手當り次第・なんでもかんでも繙讀する是れが雜駁の學者である・實は何んの役にも立たぬ學者である・抑も學問は眞理を發見するもので・眞理さへ發見すれば學んだ學問には用がないのである・蓋し眞理は自得のもので學んで得べきものでない・従つて萬卷の書を讀破しても智慧のないものには眞理が發見されぬのである眞理を自得せぬものは「ああだ」「こうだ」「ああだ」「こうだ」で日を空費するのである・世に合議政治といふものは即ち其の「ああだ」「こうだ」の結果に過ぎぬのである・例へば小田原評定がそれである・北研傳研の論争がそれである・眞に眞理に到達したものは寸鐵・人を殺すが如く・一言にして解決し得る筈である・多言を要するものや多筆を要するものは・いづれも雜駁不精のもので・何んの役にもならぬのである・譬へば玩具箱(オモチャボックス)を轉覆した様なものである・飛行機もあれば軍艦もあり鐵砲もあれば機關銃もあり・サアベルもあれば青龍刀もある・然し一ツも實用にはならぬのである今の學者の著書や論文は皆此の類である嗟

京の着倒れの話

どうゆうわけかは知らぬが・幼少の頃いろはにほへと・ちりぬるをわか・と・だんだん読んで最後に至り・ふひもせずと・いふた後(ノチ)大きな聲を出して「キヨ」と・いふように教えられてゐるから・ここに京の着倒れに就て一席述べて見ませう

衣食住の三つは人間ばかりぢや・すべての生物に・無くてならぬ物件なのであるから・苟も生物たる以上必ず・此の三物件の獲得に向つて最善の努力を拂ふのであるが・中に就て食ひ物は最も必須なものであるから・其の争奪の現象も亦劇烈なのである・近頃の政治家は一にも國民の生活安定二にも國民の生活安定と・生活の安定ばかりを説いて國民の歡心を買つてゐるが・是れだけでも人間が如何に飲食衣服のために苦勞してゐるかが窺ひ知られるのである・食ひ倒れ着倒れも無理のないことである・所で食ひ倒れ着倒れは共に飲食に驕(オゴ)り衣服に驕る・其の驕ることが「倒れ」となり敗産となるのであるから・若しも國民が贅澤をやめ・驕らず質素儉約を旨(ムネ)とすれば・倒産もなく・破産も見ずして・生活は安定となるべし

藤井乙男さんの編輯された諺語大辭典に依ると・着倒れは京都だけで・其の他の破産原因は飲食である曰く大阪の食ひ倒れ曰く江戸の食ひ倒れ曰く尾張の食ひ倒れ曰く信濃の食ひ倒れ曰く水戸の食ひ倒れ

等が其れである・紀州の着倒れ・境の建倒れもあるが・破産の原因は飲食の奢侈・贅澤に在りといふべきである・奢侈のことを西洋ではルクスイ(Luxury) (英語)又はルクス(Luxus) (拉甸語)といふ・此の拉甸語のLuxusは果物(クダモノ)が房(フサ)房(フサ)と鈴(スズ)なりに・生(ナ)ることで御膳の上に色色なものを澤山に並べることである・言ひかゆれば飲食のために金錢を浪費することが破産倒産の原因となるのである・蓋し必要以上の消費をなすこと・其れが浪費であるから・此の浪費を防ぐこと・是れが生活安定の基礎となるのである・此の故に政治家は・必要以外の入費を可及的節約すべく考案せんければならぬのである

考へて見れば昭和の國民は明治の國民に比して生活の様子が数十倍の贅澤に流れ込んでゐると・言ひ得るのである・今や日本の人間は必要以上の衣食を爲してゐるのである・恐らくは遠からず日本も着倒れ食ひ倒れ飲み倒れとなり・そして教育の仕倒れとなるであらう・見玉へ人間の病氣で死ぬ様子を!!維新前も今日も格段に相違して居らぬのでは無いか??然るに一ヶ年に醫師齒科醫師並に國民の消費する薬品の金高は数十百倍となつてゐるでは無いか??遠からず日本は薬の飲み倒れとなるであらう・嗟・嗟(昭和十一年四月二十三日書き畢る時に著者七十六歳也)

第五册 第五卷 第六十四号

第一册 第一卷 第一号

第一册 第一卷 第一号

第二册 第二卷 第二号

第三册 第三卷 第三号

第四册 第四卷 第四号

第五册 第五卷 第五号

第六册 第六卷 第六号

第七册 第七卷 第七号

第八册 第八卷 第八号

第九册 第九卷 第九号

第十册 第十卷 第十号

728
71

